

NHKスペシャル『アジアの“一等国”』に対する
非難中傷などの動きについての見解

2009年7月7日
日本ジャーナリスト会議

4月5日に放送されたNHKスペシャル「JAPANデビュー」第1回『アジアの“一等国”』を巡って、番組内容が偏向しているとして一部マスメディアと市民団体による組織的な非難・中傷、デモなどが、NHKに対して執拗に続けられている。

日本ジャーナリスト会議は、このような行為は単にNHKだけの問題に止まらず、日本における言論表現の自由そのものに対する恫喝と干渉にあたると考え、放送の自主性と自律性を尊重する立場から、直ちに中止されるべきだと考える。

この番組のねらいについてNHKは、日本が150年前の開国を機に近代化を急ぎ、西欧列強に伍して一等国の仲間入りを果たす過程で、最初の植民地として獲得した台湾での統治の歴史がどのようなものであったかを検証し、その教訓を手がかりに日本が今後アジアに対してどう向き合うべきかを探ろうとするものだとして説明している。

番組を見た多くの視聴者から、「親日一辺倒だと思っていた台湾の人々の心に、統治時代が複雑な影を落としていることが分かった」「少数民族を匪徒刑罰令で取り締まった事実を初めて知った」などの声が寄せられ、近現代史の研究者などからも、「発掘した新資料を基に植民地支配の全体像に迫ろうとした姿勢は高く評価できる」という声が上がっている。

ところが、一部の新聞や月刊誌、それにCS放送などの論者は、番組で使われた「日台戦争」「人間動物園」などの用語を捉えて、「そのような言葉は聞いたこともない」「台湾の少数民族を貶めるものだ」などと非難している。

さらに、「番組は自虐史観に立って台湾統治の負の側面だけを強調している」「台湾人の証言を恣意的に編集し彼らの心を傷つけた」「NHKは中国政府の回し者」など、根拠のない誹謗・中傷を繰り返す一方、第二次大戦中、21万の台湾人が日本軍に徴兵され、3万人が戦死した事実や、少数民族などに加えられた凄惨な弾圧には一切口をつぐんでいる。

こうした主張は結局、日本によるアジア太平洋での侵略を免罪、美化する歴史修正主義の立場に立って事実を直視しない歪んだ見方といわざるを得ない。

また、「日本李登輝友の会」などいくつかの団体は、NHKの番組担当者や、経営者の謝罪と辞任、さらにはシリーズ番組の中止を求めて集会やデモを繰り返し、この中でNHK関係者の制止を振り切って構内に乱入するなど非常識な行為も伝えられており、6月25日には8000人を超える賛同者による集団訴訟を起こすまでに至っている。

さらに問題なのは、慰安婦問題を取り上げたNHK番組に政治介入した疑いのある自民党の安部晋三、中川昭一両氏などの国会議員が、番組が偏向していたなどとして、6月11日、「公共放送のありかたについて考える議員の会」なる議連を立ち上げ、番組内容に問

題がないか検証すると決めたことである。

政権与党の力を背景にしたこうした議連の動きは、放送番組への干渉などを禁じた放送法第三条に違反する疑いがあり、NHKに睨みを利かせ、番組への萎縮効果を意図したものでないだろうか。

このような動きに対して、NHKは6月17日、番組のねらいや取材方法、用語などについて長文の説明文を発表し視聴者の理解を求めている。

説明文は、問題にされている個々の部分に関して事実に基づいた詳細な回答をしており、この問題に真摯に向き合おうとしている姿勢が感じられる。

放送された番組に対して批評を加えたり、批判的意見を述べたりすることは、番組の質を高めるためにも当然のことであるが、今回のような道理を欠いた一連の言動や威嚇的行為は、批判の域を超えており、正当な言論活動とは到底見なすことはできない。

今のところNHK経営陣や制作現場に動揺は見られないと伝えられている。

日本ジャーナリスト会議は、NHKが、こうした一部の圧力に対して毅然とした姿勢をつらぬき、今後の番組作りにおいても萎縮することなく、「放送の自主自律」の原則の下に、公共放送としての真実の追求と自由で豊かな番組づくりのために、さらに努力するよう願うものである。